

令和3年度 第2回羽島市総合教育会議 会議録

日 時	令和4年3月24日（月） 午後1時30分から午後2時45分
場 所	市役所3階 301・302会議室
出席者	<p>(出席委員) 黒田淳委員 今枝甫委員 春日民奈委員 今井田裕子委員 森嘉長教育長 松井市長</p> <p>(事務局職員) 加藤教育委員会事務局長 宮川企画部長 山田教育委員会事務局次長兼学校教育課長 小川教育総務課長 岩田学校教育課教育支援センター係長 田中企画部次長兼総合政策課長 坂倉同課係長 吉田同課主査</p>
内容	<p><u>1. 開会</u> (会議の概要説明、資料確認)</p> <p><u>2. 挨拶</u> <u>(市長)</u> 本日はご多忙の中、各委員におかれてはご出席を賜り、深く感謝申し上げるところである。 さて、昨年5月に開催した今年度第1回の総合教育会議において、生涯学習部門やスポーツ部門等の市長部局への事務移管について、ご指導をいただいたところである。現在開催中の市議会定例会で本件が議了されれば、新年度に向けての着実な整備をしていきたいと思うので、よろしく願いいたします。 また、新型コロナウイルス感染症の関係については、昨日の3月23日現在で2,441人の市民が感染し、残念だが9名の方がお亡くなりになっている。岐阜県においては、重症患者の入院者数は若干下向きの状況だが、昨日のように1週間前に比べて増加する日があるなど、一進一退の状況である。本市の2,441人という罹患者数は、市内人口の約3%に当たり、人口あたりの罹患者率は県内でもワースト上位にランクされており、まだまだ予断を許す状態ではない。おかげさまで、3回目接種も順調に進んでおり、いよいよ本格的な低年齢層へのワクチン接種を着実に進めていきたいと考えているところである。今後とも徹底的な感染防止対策を市も講じていきたいと思うので、よろしく願いしたい。</p> <p>本日の議題はICT教育の推進に限定して皆様方のご指導を賜るところである。時間の許す限り忌憚のないご指導をいただくようお願い申し上げ、冒頭のご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。</p> <p><u>3. 議事</u> <u>(1)</u> 山田教育委員会事務局次長兼学校教育課長が、ICT教育の推進について、説明した。</p>

意見交換

(市長)

資料に基づいて、順次説明をしたところである。スクリーンでは「ロイロノート・スクールと Zoom の効果的な活用」という部分をまとめさせていただいたが、まずは資料、ICT 教育の推進についての関係でご質問、ご意見があればお願いします。

(委員)

資料の 3 (1) ②に記載の関係で、iPad はどの程度家へ持ち帰ってオンライン学習は実施されたのか。資料 2-1、3 番の使用場所に「学校で使用します。」と記載があるため、このあたりのオンライン学習の量等を教えていただければと思う。

(学校教育課長)

コロナの感染状況により臨時休校となっていた昨年 8 月末ごろは、タブレット端末の使い方についてもかなり習熟が図られており、どの学校でも iPad の持ち帰りを行い、授業や帰りの会を実施され、子どもたちの元気な姿を確認していた。また、家庭に持ち帰りをして宿題の提出に使用する等の使い方を行っている学校や、先日、学級担任も含めて学級閉鎖になった学校では学級閉鎖期間中、担任の先生が自宅からオンラインで授業や帰りの会を実施したという事例もある。

(委員)

以前、家庭と学校をオンラインで結ぶ場合に、通信環境が整っていない家庭があるのが課題であると伺ったが、現在はそのような家庭はほとんどないということか。

(学校教育課長)

実はまだまだ課題で、5%の家庭で通信環境が整っていない状況である。その家庭については、学校で授業に参加いただくとか、個別に配慮し対応しているところである。

(教育長)

少し補足をすると、先ほど説明した臨時休校や分散登校時において、諸般の事情により一人で通信機器を家庭で使用できない子や通信環境が整っていない子については、密にならない人数の中で教室に来てもらい、担任の先生の話聞く、大きいスクリーンにクラスのみんなの顔が打ち出されるという形で実施している。

他市町では、Wi-Fi に拠らない LTE 通信によるタブレットを渡しているところもあるが、そのような環境を行うにはさらに経費がかかるため、現時点では先ほど学校教育課長が申し上げたように、95%ぐらいは自宅に通信環境が整っているという状況の中で、個別に配慮し対応する形をとっている。

(市長)

以前もこの Wi-Fi の関係は質疑があったところであり、隣の岐阜市に比べると汎用

内容

度が羽島市は高いということで、現在の方式で行っているという状況である。

(委員)

家庭内でのコロナ感染が心配で、子どもを自主的に休ませた際、中学校では Zoom で授業を受けられたが、小学校では Zoom での授業は受けられないということがあり、休んでいる間に授業についていけなくなったらどうしようと心配していた。別の親御さんも同様の状況があったと言っていたが、この小学校と中学校での差には何か理由があるのか。

(学校教育課長)

教師の力量差というのは当然あるため、大前提として、教師それぞれの力量アップについては来年度以降も課題にし、全体で組織的に解決して乗り越えていきたいと考えているが、そもそも授業を受けられないことは良くない。多くの小学校でも中学校のように、担任の先生が授業を行っている場面を定点で撮影し、その動画を家庭で視聴いただくといったやり方で実施しており、そういったことを今後広めていきたいと思う。

(市長)

教職員の力量アップという形だが、新年度に計画している研修やトレーニングがあれば、具体的に披瀝いただけるとありがたい。

(学校教育課長)

今年度、ロイロノート・スクール等を導入したので、6・7月に各学校のニーズに応じて研修を行った。7月中旬には全市の教職員を対象に、GIGA スクールサポーターから専門的にロイロノート・スクールの使い方等を教えていただく研修会を実施した。来年度についても各学校に GIGA スクール担当者という教員を指名しているため、校内研修はその方を拠点として充実を図っていきたい。しかし、GIGA スクール担当者に知識や研修方法等も伝えないと各学校内の標準化が図られないため、まずは4月に入ったら、GIGA スクール担当者を中心に今年度の研修計画を伝え、ロイロノート・スクールや Zoom の使い方についても今年度よりさらにレベルアップした段階で、各学校からニーズを吸い上げ、もう少し各論に入るようなテーマで研修を実施したい。それから7月あたりに全体研修、10月・11月あたりに実践報告を兼ねて、各学校の GIGA スクール担当者からどんな力量がついたかということで報告をさせていただこうと考えている。

(委員)

ICT 教育の現状に関連し、色々と思っていることを述べさせていただきたい。

実は、平成30年11月に開催された岐阜県市町村教育連合会の研究総会で、経済産業省の課長が講演された内容が革新的で、非常に印象に残っている。要約すると、AI時代の到来で大きく変わる教育内容、教育方法ということで、経済産業省もイノベ

内容

内容

ーションという関係で教育分野に進出しており、それは未来の教室というラーニングイノベーションの話であった。要するに従来の固定概念で考える教育ではもう立ち行かない、日本がグローバルスタンダードから遅れないような改革が必要だ。ということで、その時に私は、グローバル時代に生きる人間として求められる力は何なのかといったときに、自分の考えを伝えるプレゼン能力を身につける、そしてプレゼンするのに世界共通語、国際語である英語というものの力をつけなければならない、と理解した。そうした中で、文部科学省は GIGA スクール構想、それから経済産業省は未来の教室という両輪で、あれから4年くらい進んで今日に至っている。ICT教育の現状の資料に、現場で具体的にどのような形で行われているか色々と書かれており、特に新型コロナウイルスの関係でこういったデジタル的なインフラが整ったことにより、非常時にあっても授業が効果的に実施できたというメリットがあったわけである。ただ私が思うのは、総合的な評価、共感の力を総動員して答えのない問題を解決するといったことを考えていくときに、タブレットを使ってどんどんできる子と、なかなか苦手な子という個人差が大きくなるような気がしている。そこでどうやって一人一人の学力を把握し、支援をして、それをどう評価していくかというのが一つの課題ではないか、と思う。それで個人的に思い当たる課題や疑問点をピックアップすると、対面授業とオンラインの割合をどうしていくのか、あるいは授業でICTをどうやって効果的に活用していくのか、そのあたりが考えられる。ただ中には、先ほどからの意見にもあったように、色々な事情で理解が遅くなってしまう子や、一つ一つの流れで動いていってなんとなく分かったつもりでも、実際には理解できてないということがありはしないか。それと、授業形態が私達の受けてきた従来の授業とはずいぶん変わったが、教師側の子どもの捉え方や評価について、ペーパーテストの点数、定期的な考査等での評価はどうなっているのだろうか。そして一人一人にちゃんと合った形の指導というものが、こういったデジタル的なものを導入してしっかりと向上しているのか、というあたりが資料を読んで感じたことである。

先日の新聞に、羽島市の教育予算の記事があり、小さくても光る子育て教育のまちを目指していく、それは教育のデジタル化を一つの柱としていくと、市長が話されていた。教育の柱として、デジタルの柱として何を一番重点に置いて今後進めていかれるのか、少しお聞きできるとありがたい。

(市長)

委員の皆様と違い教育の専門家ではないが、教科によってデジタル導入の効果が高いところと、以前の対面の授業形式によって効果があがるものに二分されると思っている。そういうあたりの関係とともに、児童生徒の習熟度の判定をどうやってやるのか、というのがテクニク的、指導的な問題の二つに分かれているのではないかと、思っている。スクリーンで説明した中で、スタディ・ログの有効活用という課題が出ているが、そのあたりを含めて、事務局で補完いただけるとありがたい。

(教育長)

今、市長が言われたこととほとんど意を同じくするところで、予算の関係について

もそういった部分を配慮いただけているため、冒頭は私から話をさせていただき、事務局で補足する。

学びが一番大事だというスタンスであり、教育大綱や羽島市の学校教育の重点においても、学ぶ、あるいは学び合うということを非常に大事にしている。「これからの時代は、スキルを身につけてもほとんど使い物にならなくなる、将来使い物になるのは、学ぼうとする学びのスキルだけだ」という言葉があるぐらい、しっかり学んでいく力をつけていくことが非常に大事であると言われている。実はこの学びというのは、いつも市長が言ってみえる、まちづくりは人づくり、人づくりは学びづくり、の一番の起点が学びであるということを考えると、子どもたちの学びはどうなっているか、どうなっていくのかということが重要であると思っている。

委員が言われたその評価の問題、授業の参加度の問題、あるいは子どもたちの学習意識の問題。これは ICT、あるいは Zoom やロイロノート・スクールなどはあくまでツールであり、基本的な評価の仕方は今までとそう大きくは変わっていない、評価基準も同じである。ただはっきりしていることは二つある。

一つは、委員が心配されている、いわゆる子どもたちの個人差が大きくなっているのではないかということ。個人的な感触では、個人差は小さくなっているのではないか、と思っている。つまり、今までは交流するのも発言するのも、一斉授業では場面と時間が限られるが、さきほど見ていただいたように、全員の考えを画面上に表示する形であるため、もうこれは一人一人が真剣に考えないことには授業が進んでいかないわけである。

もう一つは、スタディ・ログということで、子どもたち自身も自分の学びの記録が残っていくため、どういうふうに学んできたかという、いわゆる学習の過程を自分で見ていけるわけである。そのことによってさらに次の高みを目指す学び、つまり、学びに対する意識が徐々に高くなってきている。これはそういう意味では非常に有効なツールであり、先ほど市長も言われたが、対面、オンライン、ハイブリットでやるのかということ、教科や学習場面、場合によっては単元等によって使い分けていく、これがやはり教員の力量だと思う。道具を使うことについてはみんなある程度習熟していると思うが、先ほど委員が言われた小学校で使われていないというのは、こういった事情で使われないのかまた精査する。このように考えていくと、実はこの指導力の差というのは、ICTに限ったことではなく、普段の授業でも残念ながら差がある。この差は、教材研究や児童生徒の学習状況を理解する能力などに依るところが大きいと思うが、やはり子どもたちの学びをどう高めていくか、一番大事なところは、子どもたちの学びを子どもたち自身で高めようとしていくという、要はメタ認知的な学びをさらに高めていくことが必要ではないか、と感じている。来年度以降は未定だが、本市では産官学共同での学力向上の研究をしており、子どもたちがドリルをやった結果、自分の強みや弱みがどこかはっきりさせて、さらにどんな学びをしていけばよいか、ということの研究をしている。そういった意味で、この ICT というのは子どもたちの学びを高めていく上においては有効であるが、委員が言われたようにいくつかの大きな課題があるため、そこを一つずつクリアしていく必要があるのでは、と感じている。

内容

(学校教育課長)

2点説明させていただく。

まず冒頭で、一人一人の能力を把握し支援することが課題である、という大きな課題を提示いただいたが、この点については具体的に現在、羽島市独自で「情報能力活用カード」の作成を完了している。このカードについては、GIGA スクール担当者の知恵をそれぞれの学校の実態に応じて出していただき、市としてまとめているものである。来年度からはこのカードを使って、子ども一人一人がどのくらい自分ができるのかチェックし、まずは子ども理解に努めていきたいと考えている。

それから、先ほど教育長からスタディ・ログの説明があったが、自分で記録を残していき評価に繋げるといったことで、教師の側から立つと先ほど大きな課題で、スタディ・ログの有効活用方法の究明という形で説明しているが、各教科で、どの場面のどんなカードがどのように評価すると良いのか、といった非常に質の高い評価を今後していかなないと子どもが適正に評価されないのではないかと、いうことを考えている。

評価方法も変わり、知識・技能、思考・判断・表現、主体的な学習態度といった三つの観点から評価していくわけだが、どのカードがその三つの観点を評価するにあたって非常に有効なのか、そういったことについて来年度は研究を深めていきたいと考えている。

(委員)

ICT にマイナス要素があるということではなく、考えられる実体として、そういうことも考慮しながら進めていかないと難しい点があるのではないかと、思っている。今は非常に便利で、インターネットを調べればほとんど回答が分かり、特にスマホではわざわざ手で入力しなくても音声入力でもほとんど回答が得られる。ただその反面、こういったタブレットの使用により、自分で考える力が向上するという意見もあれば、低下するというデメリットも挙がっている。ということは、調べて目視すれば分かるということで、なかなか書くことや、繰り返し口に出して覚えるといったことをやらなくても済むというところで、ちゃんと記憶に留まっているのか。例えば平均点が上がる、自分で考えることができた、集中することができた、じっくり教師がアプリの中で生徒を観察できるようになった、暗記ではなく現象として記憶しているといった良い点がいっぱい挙がっている反面、そのデメリットもチェックし消していきながら、みんなのレベルアップを図っていく、というのが一番良い方法だと思う。だからそういった点で現状考えられる疑問点を先ほど少し指摘させていただいたところである。

(市長)

言われたとおり、スマホの扱いが上手い方が秀でるというわけではないので、日本の場合はあくまで私見だが、大学教育の中でも単位を取らせるという中で、覚えることだけに特化していて、理解をするという授業が文科系ではなかなかない。そういったあたりが今後、文部科学省でこのような最先端の ICT 機器を使うとともに、情操教育とそれから学び確かめるという教育をコラボレーションしたような形を取らざる

内容

を得ないのではないかと思う。委員が言われた、とりわけ欧米のような、児童生徒がいろいろな形での連携や意見交換ができる国際規格を整えたお子さんを育てているような教育に繋がるのではないか、そのように思っている。

それから資料1の関係、8つの事項の中で特徴的な事象は発生したか。

(学校教育課長)

ネットトラブルに関わって、この2年間で18の事例が発生しており、大きく分けると、羽島市では3種類に総括できるものと考えている。

1つ目は、悪口を言う、あるいはネット上の言葉がきっかけで叩く、蹴るといった大きなトラブルに発展した事例である。

2つ目は、中学校において、SNS上でなりすましを行ったという心配される事例である。

それから3つ目、高額課金ということで、小学校と中学校でそれぞれ一例ずつ発生している。特に中学校では、この場ではいくらか申し上げられないほどの高額な課金の事案が発生しており、指導をさせていただいているところである。

(市長)

投資やお金儲け、経済活動という、そういう教えないというのが日本の教育の特徴である、とインターネットに書いてあったが、まさに低い年齢からの高額課金というのは、非常に暴力的な事件以外にもセンセーショナルな話題があるところである。

資料3の関係については、このような先端的で、非常に厳しい門外不出のような体験もできるというのが、新たなICT社会の現実であると考えているところである。

それでは、スクリーンで事務局から提示させていただいた三つの課題の中で、教職員の力量アップ、スタディ・ログの関係は既に説明したが、最後のライセンス数増加に伴う、他校や地域、企業とのオンライン授業の実施という現段階での見通し、計画のあらましがあれば、説明をお願いします。

(学校教育課長)

Zoomの活用については今年度、100人まで無制限で使えるライセンスを教育委員会で4本契約していた。各学校からの申請に応じて4本のライセンスを貸し出すという運用をしていたが、学校側から、オンライン授業をもっと行うにはライセンスを増やしてほしいといった要望もあり、来年度については大規模校で6本程度、小規模校で3本、中規模校で4本のライセンスをそれぞれの学校に割り振り、もっと自由に使ってもらえるようにし、オンライン授業の充実を図っていきたいと考えている。

(市長)

大規模校、中規模校、小規模校の具体的な学校名を教えてください。

(学校教育課長)

大規模校が羽島中学校、竹鼻中学校、中央中学校、桑原学園。小規模校が足近小学

校、小熊小学校、堀津小学校、中島小学校。中規模校はそれ以外である。

(教育長)

例えば Zoom のライセンス数の増加に伴ういわゆるネットワーク回線の容量については、今後どこまで活用するかによるが、本当にストレスなく、大人数で同時に何かやろうとすると、現行のものから場合によっては拡充する必要があるのではないかと、今後そういったことも課題になるかもしれないと感じている。

(委員)

ICT 教育の推進についての資料の 3 (2) に、不登校児童生徒への学習支援、と記載があるが、羽島市では現状、何名ぐらい実績があるか教えてほしい。

(学校教育課長)

不登校児童生徒については現在、105名である。昨年度が3月末時点で106名という状況だった。

なお、オンラインの授業については、不登校傾向のある児童生徒だけではなく、欠席された児童生徒の家庭にも希望があれば、特に中学校では配信している状況であり、また、適応指導教室「こだま」においては現在、3名の不登校のお子さんが家庭とこだまを繋いで授業している状況である。

(委員)

ICT 教育の推進についての資料の 3 (3) の 3 点目、デジタル教科書の活用ところで、足近小学校の記載がないが、足近小学校はデジタル教科書を1冊も持っていないということか。

(学校教育課長)

令和2年度に羽島市で、全ての小学校に理科のデジタル教科書を導入しており、足近小学校でも既に実践している。資料に記載している学校名は、文部科学省のデジタル教科書普及促進事業の一環の関係で、実は該当市町の学校で約半数ぐらいしか希望が通らないといった事業の結果を掲載しているものである。

(委員)

ICT 教育の推進についての資料の 4 (1) ③に、アプリのグループ機能によるグループをつくと書いてあるが、他市町で実施されたところでは、教師がグループに属していないと非常に危ないということがあった。生徒会の執行部会など、自主的な活動に役立てた例もあったが、子どもを信じるだけでは難しいと感じる部分がある。

それから、(2) 情報モラル教育の充実の 2 点目に、児童生徒による主体的なルールづくりとその見届け、とあるが、岐阜市などはタブレットを常に自分で持っているため、大人が思う以上に子どもたちが新たな使い道、抜け穴を本当に知らないうちに使っているということで、能力はるかに進んでいるな、と感じた。それで後手後手

内容

内容

の指導になってしまう学校もあったので、子どもたちのそういう部分がすごく進んでいるということを自覚しながら、指導者側がきちんと手を打っていかないと本当に大変なことになってしまうのでは、と思っている。正木小学校は授業の時しかタブレットを使っていないということだが、自由に持っている学校などは、休み時間にみんながタブレットを使ってゲームをしているなどのジレンマがあり、先生の指導がなかなか通らなかったという困難を聞いたことがある。また、小学3年生の子で、5年生や6年生の理科や社会も勉強している事例があり、能力を高めることにはタブレットは非常に効果があると感じる反面、抜け穴を見つけて音楽を聴いているような子どもたちの様子を見ると、タブレットを自由に使わせてあげたいけれど、どんな手を打って正しく子どもたちに使わせていくかはこれから非常に難しい課題だと思っている。

(市長)

資料の4 (1) ③と(2)の2つの関係のリスクについて、リスクヘッジの方策をあらかじめ準備いただいているかどうか、情報提供をお願いできるとありがたい。

(学校教育課長)

まず資料の4 (1) ③、アプリのグループ機能の関係について、これは保護者や地域の方対象であり、大人向けしか考えていないため、お子さんがそういったグループ機能を使うことはないものと考えている。お子さんを中心に家族の中で4名までは登録できるような形を想定して予算化をしている。

それから2点目の情報モラルの抜け穴ということで、これは本当に心配しており、羽島市のタブレットでは、ゲームなどのアプリのインストールは勝手にできないようになっているが、アプリをダウンロードする方法があるということを聞いている。そうならないよう、各学校で約束をつくり、現在のところ羽島市では違法な使い方の報告はないが、今後も気をつけていきたいと思っている。

(委員)

今の小学生や中学生が現役になる時代、2050年ごろには日常的にデジタルの世界がもっと進んで、人口減少に伴って、コンピューターなどで色々な仕事をやらないとなかなか業務が回っていかない時代が来ると思う。そういうことを考えると、色々デメリットがあっても、タブレットを家に持ち帰って、日常的にそういったデジタルの環境に慣れて成長していくというのが本来は理想だと思う。だから指導をしながら、そういう力を伸ばしていくことをやはり考えなければならないのではないかと思う。

もう1点、デジタルで見ればすぐに理解できるということで、デジタル教科書が今後どんどん増えていくと思うが、文章の行間を読む、理想を膨らませる、想像力を伸ばすといった部分では紙の教科書の良さもある。デジタル教科書に変わっていく際、現場の先生に教育委員会としてどういったことを注意点として指導されるのか。

それから教科書を通して心を育てたり、人間性を育てたりという部分がある。勉強だけが学校生活のすべてではないので、学力一辺倒、とにかく学力というところがあ

	<p>まりに強調されると、先日の大学入学共通テストのような問題も発生してくるため、そういった点のバランスを考えながら、教育は進めていかなければいけないと思う。前段で言ったように、デジタル教科書の普及に伴って、教育委員会として現場への指導的なことで留意するようなことがあれば教えてほしいと思う。</p> <p><u>(学校教育課長)</u></p> <p>デジタル教科書を今後どんどん使っていく機会が増えていくと思うが、子どもたちが拡大縮小、ハイライト機能等を使えるようになるにはそれなりに時間をかけてやっていかないといけないということで、使い方については今後、約束をしていく予定である。このたびの3月議会の一般質問において、タブレットに慣れて親しんでどんどん習熟していくと、時間をかけてどうしてもやりたくなるといった面があり、実は目の健康といったことで懸念がある、との質問をいただいた。まずやらないといけないと考えているのは、タブレットを見る時の姿勢や距離、あるいは就寝1時間前には使ってはいけない、といったルールづくりも踏まえて、また今後考えていきたい。</p> <p><u>(教育長)</u></p> <p>少し補足と、また別の視点から話をさせていただく。</p> <p>やはり学校よりも実社会とか、家庭の方が特に子どもについては、スマホやタブレットを中心に、かなり進んでいるのが現状ではないかと思う。小学生の半数以上がスマホを持っている。ある調査によると、スマートフォンに触れる割合は0歳児で8%、1歳児で20%、その後、小学校に入るまでで9割近い子どもたちもスマホに触れているという状況である。ピンチアウトなどの操作に慣れているわけで、学校でタブレットを渡しても、最初にどうやってやるのか戸惑う子は低学年から高学年まであまりいない。そうすると二つの側面があり、一つはやはり大事に扱うということと、もう一つはやってはいけないことを徹底するということである。スマホに限らず、道具はみんなそうだが、この道具を使うと良い勉強ができるとか、この道具を使うと自分にとって大変プラスになると思う、実感する子は悪いことに使わない、粗末に使わない。こういったスマホやタブレットといったICT機器は文房具の一つである、と言い続けてきている。文房具を有効に使う、これが有効に使えない授業だと本当に危惧されることが起き得る。廊下でゲームをやるとか、先ほど課金の話もあったが、ICT機器の活用は限りなく高めようと思えばいくらでも高められるため、どちらの方向に行くかは家庭でコントロールするのは難しく、やはり授業でどういう方向づけをしていくかだと思う。そういう意味では、ICT機器等をどう扱うかという、委員が危惧されていることは学校のミッションとしてはすごく大きい、これから大きな要素になってくるだろうと考えている。</p> <p>あともう一点、市長が言われたスタディ・ログの話だが、これは非常に大事だと思っている。それは先生がどうやって活用するかに加え、子どもたちがタブレットなどを自分の学習にどうやって有効活用していくかということ子ども自身が自覚すると、非常に良いスキル、武器になっていくと思う。実は今、産官学の連携により、色々データを集計してフィードバックしているが、今後こういったスタディ・ログを有効</p>
内容	

に活用できるようなアプリなど、分析アプリといったものが将来導入されることによって、教師の指導や子どもたちの学びが飛躍的に高まっていくのではないかと感じている。この方向性は文部科学省も今後、研究の余地があるということで検討しているところであり、少し紹介させていただく。

(委員)

子どもが学校を休んだときに、以前は近所の子が休んだ子の家まで文書を届けなければいけなかったが、現在では担任の先生からタブレットに翌日の時間割を送ってもらい、子どももそれを見て、先生に確認しましたと返事を送っているのを見て、学校や人前では話しづらいこともタブレットを使って先生に相談ができるなど、何か活用できると良いのではないかと感じた。

また、宿題の関係では、タイピングのゲームが学校で流行っているようで、宿題はタイピングばかりやってきて、結局文字を書かなくなってしまうということで、担任の先生が、それならできた回数をノートに書き写すようにというようにされた。あと、音読についても、授業になると読めない子が多いので、録音してタブレットで送るようにとされるなど、先生もそれぞれの状況を見ながらちゃんと対応してくれていると実感している。先生には負担が増えてしまうかもしれないが、先生に相談できるものとしても、学校のみんなの前ではなかなか言えないことなど、タブレットを通じてやり取りができるようになると良いのでは、と思う。

(市長)

実例に基づいたご提言、ありがとうございます。その他よろしいですか。それでは以上をもちまして、本日の議事の関係の審議を終了させていただきたいと思う。

(2) その他

特になし

(閉会 午後2時45分)